

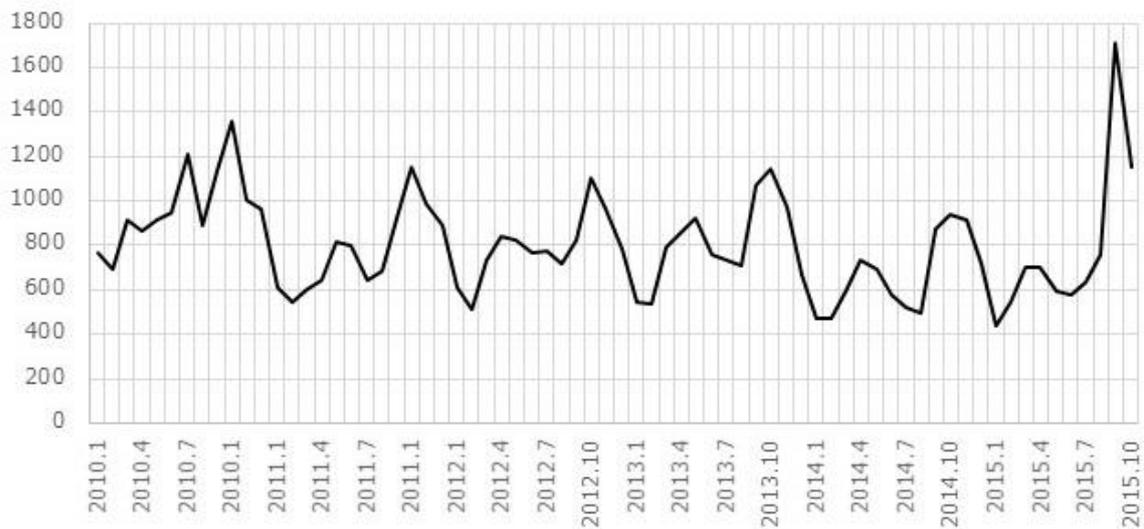
日本小児アレルギー学会による小児気管支喘息発作例の全国調査のまとめ

2015年9月、喘息発作入院の「これまでにない」急増が全国各地で経験されるとともに、ICU管理の重症喘息発作例でのエンテロウイルスD68 (EV-D68) 検出報告があった。そこで、日本小児アレルギー学会は、その実態を明らかとして今後の予防策に資することを目的に、喘息入院例に関する全国調査を行った。

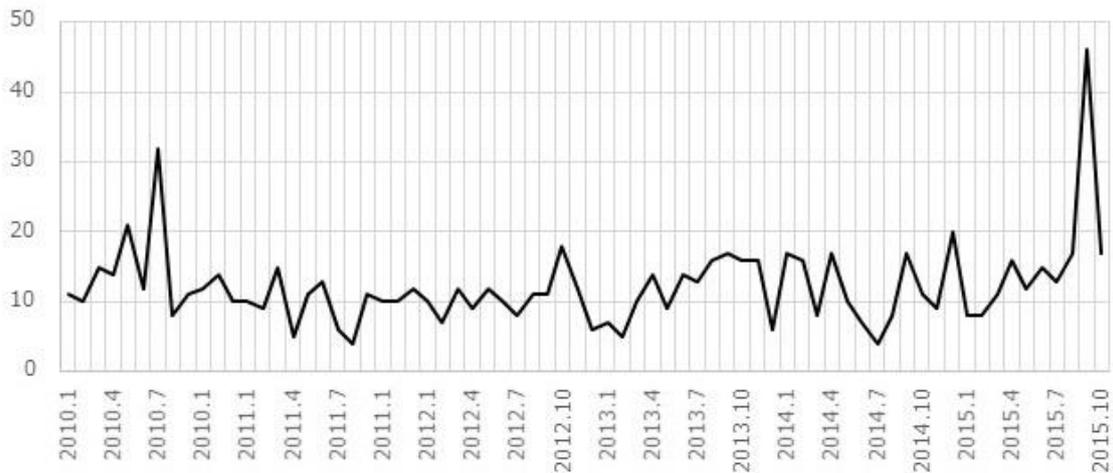
2015年11月より全国の会員所属病院および推薦する基幹病院に依頼して、所定のフォーマットファイルに入力したものを、学会事務局あてのメールでの回答を依頼した。2010年1月-2015年10月までの期間で、気管支喘息(喘息様気管支炎を含む)の病名による入院例数、ICU管理例数、人工呼吸管理例数(nasal high flow、nasal CPAPを含む)で、それぞれ月別、性別、年齢層別(0-2歳、3-6歳、7-12歳、13-19歳)に集計した。2015年に関しては、ウイルス検索の有無とEV-D68検出例数、AFP例数、うち喘鳴を伴った例数も調査した。

2015年12月3日までに全国102施設から回答を得た。喘息発作入院数59,582例、ICU管理例341例、人工呼吸管理例871例であった。調査期間中の欠落データがない94施設においては、2015年9月が入院例数(1,723例)、ICU管理例数(16例)、人工呼吸管理例数(46例)ともに最多であった。

喘息発作入院数



人工呼吸管理数



この月の入院例数は0-2歳619例、3-6歳869例、7-12歳378例、13-19歳64例、ICU管理例数は0-2歳6例(1.0%)、3-6歳6例(0.7%)、7-12歳2例(0.5%)、13-19歳2例(3.1%)、人工呼吸管理例数は0-2歳16例(2.6%)、3-6歳20例(2.3%)、7-12歳10例(2.6%)、13-19歳10例(15.6%)で、入院例数は3-6歳が多い一方、ICU管理率、人工呼吸管理率は13-19歳が多かった。また、性別(男/女)では、入院例数1,136/784例、ICU管理例数4/12例、人工呼吸管理例数20/26例と、男児の入院が多い一方、女児に重症化の傾向がみられた。

2010年以降、2015年9月の入院例数が最多であった全国調査の傾向は、年齢層3-6歳、7-12歳の結果が反映されていたが、0-2歳、13-19歳ではその傾向はみられなかった。同じく、2015年9月の喘息発作入院例数が最多の傾向は関東地域、北陸地域、東海地域、四国地域でみられたが、他の地域では明らかではなかった。

2015年の喘息発作例に対するウイルス検索は10施設167例で実施され、34例にEV-D68が検出された。9月にEV-D68を検出しえた5施設における検出率は9月が44%、10月が5%であった。また、2015年のAFP症例は11例あったが、喘鳴を伴ったのは2例のみであった。

日本における2015年9月のEV-D68流行に一致した、小児喘息入院数、同ICU管理数、同人工呼吸管理数の著しい増加を確認した。日本では2015年の他、2010年と2013年にEV-D68が流行しており、2013年も2015年に次ぐ喘息入院例、ICU管理例、人工呼吸管理例の増加がみられていたことは興味深い。ウイルス検索例が少ないが、小児とくに学齢期前児において、EV-D68が入院や人工呼吸管理を必要とする喘息増悪を誘発した可能性が高い。一方、Hopkins症候群と言われる喘息とAFPの合併は多くないことも明らかになった。

近年、抗炎症療法の普及で喘息の管理は向上したとされるが、今回の調査で明らかになったように急性増悪による入院は未だ非常に多く、その疾病負担は大きい。そして、これが感染症流行によって、あ

たかもエピソードのごとき様相を呈することにも注目すべきである。喘息は環境因子の影響を強く受け、とくに急性増悪は気道感染症のインパクトが大きい。

今回はレトロスペクティブな調査であったが、今後、感染症サーベイランスと連動させながら、喘息発作入院動向を前向きにモニターするシステムを構築するならば、気道感染症による喘息急性増悪予防に大きく寄与できると考える。

今回の調査に迅速なご協力をいただき、貴重なデータを提供していただいた全国の先生方に深謝申し上げます。

文献

是松聖悟、三浦克志、長谷川俊史、長尾みづほ、中村晴奈、杉浦至郎ほか. エンテロウイルス D68 流行期における小児気管支喘息発作例の全国調査. IASR 2016;37:31-33

是松聖悟 (大分大学)、三浦克志 (宮城県立こども病院)、長谷川俊史 (山口大学)、
長尾みづほ (国立病院機構三重病院)、中村晴奈 (国立病院機構三重病院)、
杉浦至郎 (あいち小児医療総合センター)、岡田賢司 (福岡歯科大学)、
藤澤隆夫 (国立病院機構三重病院)